



障害のある人のスポーツへの多様な参加を支援するために

障害のある人のスポーツ参加支援推進委員会

第14回 東京パラリンピック競技大会への参加に向けた期待と準備 ②

前号に引き続き、本号ではパラ水泳チームへ同行する一般社団法人日本パラ水泳連盟の本山幸子氏に競技に関わることとなった経緯、東京パラリンピックへの参加に向けた苦労、期待などについてご報告いただく。

東京パラリンピック パラ水泳競技への参加に際して

一般社団法人日本パラ水泳連盟 本山 幸子

1. 障害者スポーツに関わることとなった経緯

学生時代、脳性麻痺児の水泳指導にボランティアで参加することになり、陸上では思うように動けなくても水の中で思い切って動けることの楽しさと、そのときの子供たちの笑顔に魅力を感じ、パラ水泳に関わり始めるようになった。今は、作業療法士という専門職の視点と水のもつ特性をうまく利用し、水泳コーチと協力して、選手のすそ野を広げること（普及）、頂点を高めること（競技力向上）、パラ水泳に関わる人材の育成、クラス分け、選手の健康面の維持管理、トレーニング、感染対策など、多角的多面的に関わっている。東京パラリンピックの開催が決まった際には、長年の関わりの集大成としても楽しみになった。

2. 東京パラリンピック参加に向けての準備と苦労

1995年プレアトランタパラリンピック大会に参加して以来、家庭の事情でしばらく海外遠征等は控えていたが、2018年より海外遠征への同行を再開した。2020年2月にメルボルンワールドシリーズに参加後、世界はコロナ禍に陥ってしまった。コロナ禍となってからは、競技団体のガイドライン作成

や強化選手の練習拠点であるナショナルトレーニングセンター（NTC）での感染対策に携わっている。医療現場での知識や前職で医療安全管理委員会の業務に携わった経験がとても役に立ったと感じる。

一番苦労したことは選手のクラス分けである。パラリンピックでは、大会参加に必須の資格判定にあたる「国際クラス分け」があり、選手は一定の要件を満たす必要がある。コロナ禍により東京パラリンピックが1年延期になったことで、クラスの有効期限切れなどによる再審査で、この国際クラス分けを受けなければならない選手が増えた。しかし、国際クラス分けを行う大会は次々に中止となり、日本代表推薦選手を選考する際にも、クラス分けの条件を満たせないなかの選考を余儀なくされた。国際クラス分けの条件を満たすためには海外遠征に行かなければならず、帰国後は2週間の自主隔離となり、通常は2週間で終わる遠征が、1ヵ月程度かかることになる。

さまざまな感染対策をとって、海外遠征や大会も実施している。これまで選手は開催を信じて、淡々と練習を積み、生活上もとても気をつけて日々過ごしてきた。感染拡大による医療圧迫などのことばを

聞くたび、選手も選手をサポートする我々も複雑な心境になったが、選手たちのパフォーマンスは多くの皆さんに感動や勇気を与えることは間違いない。そのため、今は肅々と感染対策を講じて関係団体と連携して、選手が練習成果を存分に発揮できるように尽力している。

3. 2度目の自国開催の東京パラリンピックに期待すること

1964年開催の東京パラリンピック大会のレガシーの一つは、障害者スポーツセンターなど、障害がある方の専用・優先施設を開設することだったが、2020年東京パラリンピックのレガシーは、障害があってもなくても、身近にあるプールで水中運動や水泳ができるようになることだと思う。この実現には多大な困難もあると思うが、日本パラ水泳連盟での活動を通じて、また個人的にも取り組んでいきたいと思う。



前腕切断の背泳ぎ 日本パラ水泳連盟提供（撮影 X-1）

【ダンスバトルイベント中止のご報告】

COVID-19 感染拡大のため 2021 年 9 月へ開催を延期したダンスバトルイベントは、COVID-19 の収束および一般のワクチン接種の普及が開催までに見込めないこと、また日本作業療法学会（仙台）期間中に開催を予定していたため、学会がオンライン開催になったことを受けて、残念ながら、開催を中止することといたしました。